

【古文】

いづれの御時おほてまひにか、女御にようじ、更衣かういあまたアさぶらひたまひけるなかに、①いとやむごとなき際きまにはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。

はじめより我はと思ひ上がりたまへる御方がた、めざましきものにおとじめ嫉ねみたまふ。同じほど、それより下臈げらふの更衣たちは、ましてやすからず。朝夕あさゆふの宮仕みやつかへにつけても、人の心をのみ動かし、恨みを負ふ積もりにやありけむ、いと篤あつしくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、いよいよあかずあはれなるものに思ほして、②人のそしりをもえ憚はぶらせたまはず、世のためしにもなりぬべき御もてなしなり。

上達部かんだちめ、上人うへびとなども、あいなく目を側そばめつつ、「いとまばゆき人の御おぼえなり。唐土もろこしにも、かかる事の起こりにこそ、世も乱れ、悪しかりけれ」と、イヤウヤウいやうやう天あめの下したにもあぢきなう、人のもてなやみぐさになりて、楊貴妃やうきひの例も引き出でつべくなりゆくに、③いとほしたなきこと多かれど、かたじけなき御心みこころばへのたぐひなきを頼みにてまじらひたまふ。

父の大納言だいなごんは亡くなりて、母北の方きたのあたなむいにしへの人のよしあるにて、親うち具ぐし、さしあたりて世のおぼえはなやかなる御方がたにもいたう劣らず、なにごとの儀式をもてなしたまひけれど、④とりたててはかばかしき後見うしろみしなければ、事ある時は、なほ抛より所なく心細げなり。

【与謝野晶子訳】

どの天皇様の御代であったか、女御とか更衣とかいわれる後宮こうきゆうがおおぜ

いいた中に、最上の貴族出身ではないが深い御愛寵ごあいちょうを得ている人があった。最初から自分こそはという自信と、親兄弟の勢力に恃たのむ所があつて宮中にはいった女御たちからは失敬な女としてねたまれた。その人と同等、もしくはそれより地位の低い更衣たちはまして嫉妬しつとの焰ほのおを燃やさないわけもなかった。夜の御殿ごてんの宿直所とくいじこから退さかる朝、続いてその人ばかりが召される夜、目に見耳に聞いて口惜くやくしがらせた恨みのせいもあったかからだが弱くなって、心細くなった更衣は多く実家へ下がっていがちということになると、いよいよ帝みかどはこの人ばかり心をお引かれになるといふ御様子で、人が何と批評をしようともそれに御遠慮などというものがおできにならない。御聖徳ごせいとくを伝える歴史の上にも暗い影の一所残るようなことにもなりかねない状態になった。

高官たちも殿上てんじやう役人たちも困って、御覚醒ごかくせいになるのを期しながら、当分は見ぬ顔をしていたいという態度をとるほどの御寵愛ごちゆうあいぶりであった。唐の国でもこの種類の寵姫ちゆうき、楊家の女の出現によつて乱が醸かもされたなどと陰かげではいわれる。今やこの女性が一天下の煩わづらいだとされるに至った。馬鬼ばかいの駅えきがいつ再現されるかもしれぬ。その人にとっては堪たえがたいような苦しい雰囲気ふんいけいの中でも、ただ深い御愛情ごあいじやうだけをたよりにして暮らしていた。

父の大納言はもう故人こじんであった。母の未亡人が生まれのよい見識のある女で、わが娘を現代に勢力のある派手な家の娘たちにひけをとらせないよき保護者たりえた。それでも大官たいかんの後援者を持たぬ更衣は、何かの場合にいつも心細い思いをするようだった。

※馬鬼の駅：唐の玄宗皇帝は、楊貴妃を寵愛するあまり悪政を行なった。そのため、安史の乱が起

こつて、唐は滅亡の危機にさらされた。この乱の最中に、楊貴妃は馬鬼という町で殺害された。

(1) **仮名遣い** ア～ウを現代仮名遣いに直しなさい。

(2) **現代語訳** ①～④を現代語訳しなさい。

(3) **内容把握** 次の各文について、【古文】の内容に合致するものには○、合致しないものには×と答えなさい。

ア とりわけ帝の寵愛を受けていた桐壺の更衣は、高貴な家柄の出身だった。

イ 帝の寵愛を得られると自負していた者たちは、桐壺の更衣を快く思っていないかったので、彼女を里帰りさせた。

ウ 桐壺の更衣は病弱になり実家に帰っていることが多かったが、そのよ
うな姿を帝はますますいとおしく感じた。

エ 上達部や上人は、楊貴妃の例を引き合いに出して、帝と桐壺の更衣との
関係を賞賛した。

オ 桐壺の更衣は、父が亡くなった後、古風で教養のある母に大切に育て
られてきた。

(4) **古文常識** 次の文章の **A**・**B** に当てはまる言葉を、【古文】から抜き出して答えなさい。また、**C** に当てはまる言葉を答えなさい。

天皇の住む**清涼殿**の北側にある御殿を**後宮**という。

後宮には、天皇に仕える女官たちが住んでいた。彼女たちの最高位が、皇后（天皇の妻）と皇太后（先帝の妻）を総称した**中宮**である。中宮に次ぐ身分の女官が **A** で、その次が **B** である。また、天皇の妻たちに仕える侍女は **女房** と呼ばれる。

【古文】には、帝に寵愛される女性が登場する。彼女の名前は物語中で明かされていないが、一般的には「**C**の更衣」と呼ばれている。「**C**」とは、天皇がこの更衣に与えた部屋の名前である。「**C**」の更衣と天皇との間に生まれた子どもが**光源氏**である。

(5) **文学史** 次の文章の **A** から **J** に当てはまる言葉を答えなさい。

【古文】は、**A** 時代中期に成立した『**B**』の一節である。作者の **C** は、**D** に出仕した。

『**B**』は、それぞれ優雅な名の付いた **E** 帖からなる長編物語で、その主題については、近世の国学者 **F** が『**G**』の中で「**H**」と述べている。物語は内容上三部に分けられ、特に第三部の「**橋姫**」から最後の「**I**」を「**J**」という。

		(5)	(4)	(3)	(2)				(1)	
		F	A	A	④	③	②	①	イ	ア
		G	B	イ						
			B	ウ					ウ	
		H	C	エ						
		I	D	オ						
		J	E							

- (1) ア さぶらいたまいける イ ようよう ウ あじきのう
 (2) ① それほど高貴な身分ではないが、きわだつて帝のご寵愛を受けていらつしやる女性がいた

- ② 周りの人たちの非難にも遠慮することがおできにならず
 ③ とてもきまりが悪いことが多いけれども、もつたいないほどの(帝の)ご愛情が比べるものがないのを頼りにして宮仕えしなされる
 ④ 特別にしっかりと後ろだてでもないの

①・いとくぬ ↓ それほどくぬ

「いと」は、下に打消の語を伴って、「それほどくぬ」という意味になる。①の「ぬ」は、打消の助動詞「ず」の連体形。

・時めきたまふありけり ↓ 「寵愛を受けていらつしやる女性がいた

尊敬の補助動詞「たまふ」は「時めき」に接続しているので、「ご寵愛を受けていらつしやる」と訳す。「ご寵愛を受けていらつしやる女性」や「女性がいらつしやる」は、厳密には誤訳となるので要注意。

重要古語

- ・やむごとなき || やむごとなし ↓ 形 高貴だ。
- ・際 ↓ 名 身分。家柄。
- ・すぐれて ↓ 副 きわだつて。とりわけ。
- ・時めき || 時めく ↓ 動 寵愛を受けて栄える。
- ②・えくす ↓ くできない

②では、「えくすたまはず」なので、「くをおできにならず」「くできなさらず」などと訳す。尊敬の補助動詞「たまふ」の訳をどう組み合わせるかがポイントである。

・くせたまはず ↓ くなさらず

尊敬の補助動詞「たまふ」の直前にある「せ」「させ」は、尊敬の助動詞「す」「さす」の未然形である場合が多い。②の「せ」についても、「くさせ」という使役の意味で訳すのは間違い。

③ 重要古語

- ・はしたなき || はしたなし ↓ 形 きまりが悪い。
- ・かたじけなき || かたじけなし ↓ 形 もつたいない。恐れ多い。
- ・たぐひなき || たぐひなし ↓ 形 比べるものがない。
- ・まじらひ || まじらふ ↓ 動 宮仕えする。

④・後見しなければ ↓ 後ろだてがないので

「し」は強意の副助詞なので、特に訳さない。サ変動詞「す」の連用形と混同して、「後見しなければ」を「補佐しないので」などと訳すと間違い。また、「なければ」は、形容詞「なし」の已然形に接続助詞「ば」が接続しているので、「ないので」(順接の確定条件)と訳す。「なければ」(順接の仮定条件)は誤訳。

重要古語

- ・とりたて (て) || とりたつ ↓ 動 特別に取り上げる。
- ・はかばかしき || はかばかし ↓ 形 しっかりとっている。頼りになる。
- ・後見 ↓ 名 年少者の後ろだてとなって補佐すること。また、その人。

- (3) ア × イ × ウ ○ エ × オ ○
 (4) A 女御 B 更衣 C 桐壺
 (5) A 平安 B 源氏物語 C 紫式部 D 中宮彰子
 E 五十四 F 本居宣長 G 源氏物語玉の小櫛
 H もののあはれ I 夢浮橋 J 宇治十帖